

琉球大学学術リポジトリ

那覇市公会堂における地域主義建築表現に関する研究：設計競技の企画運営及びその設計内容について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学 公開日: 2016-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 前田, 慎, Maeda, Makoto メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33625

琉球大学大学院
理工学研究科長 殿

論文審査委員

主査 氏 名 小倉 暢之

副査 氏 名 清水 肇

副査 氏 名 木方 十根



学位（博士）論文審査及び最終試験の終了報告書

学位（博士）の申請に対し、学位論文の審査及び最終試験を終了したので、下記のとおり報告します。

記

申請者	専攻名：総合知能工学 氏名：前田 慎 学籍番号：118674E	
指導教員名	小倉 暢之	
成績評価	学位論文 <input checked="" type="radio"/> 合格 <input type="radio"/> 不合格	最終試験 <input checked="" type="radio"/> 合格 <input type="radio"/> 不合格
論文題目	那覇市公会堂における地域主義建築表現に関する研究 ～設計競技の企画運営及びその設計内容について～	
審査要旨（2000字以内） 本論は戦後沖縄における地域主義建築の代表作の一つである那覇市公会堂について、本土復帰前の状況下で地元建築家及び行政関係者が取り組んだ地域主義建築の表現について考察したものである。本論は序章と終章を含む7つの章により構成され、1章では設計競技の背景、2章では設計競技の企画運営、3章では設計体制、4章と5章では風土性の建築表現について那覇市公会堂の内容とその他の事例について述べている。 那覇市公会堂は1970年竣工し、沖縄における地域主義建築の代表作の一つとして知られる建築である。当時はまた、2年後の本土復帰を前にした地元社会における文化的アイデンティティーへの関心が高まった時期でもあり地元社会では注目を集めた建築である。50年代初		

(次頁へ続く)

期の米軍基地建設活動に伴って急速に普及したコンクリート建築の多くは、所謂国際様式と呼ばれる機能性・合理性重視の四角な箱形であり、それらが地元社会に広く普及しつつあった時代の中で沖縄の伝統文化を含む風土性の表現への希求は沖縄近代建築史研究における重要な研究テーマの一つとなっており、本研究論文の学術的意義は大きい。

申請者はこのテーマについて60年代中頃に沖縄で初めてとなる本格的競技設計で選ばれた那覇市公会堂（現在の那覇市民会館）に着目し、その競技設計の運営体制からひも解き、当選者の設計体制、そして風土性表現に関する意匠的取り組みの解明を行った。その過程では当時の文献資料の収集、多数の建築関係者へのヒアリングを精力的に行い、多くの新たな資料の発掘も行った。また、当時の関係者の多くは既に物故者となっているが、幸いにも幾人かの存命者への直接インタビューが得られたのも時期を得た貴重な研究成果に繋がった。

競技設計の企画運営については、那覇市の公文書記録及び関係者へのインタビューから当時の市政方針との関わりの中で企画された経緯が克明に明らかにされている。また、当時は日本本土との繋がりが希薄であった建築界においても本土の著名な建築家及び建築学者を審査員に指名する等、本格的競技設計の審査体制の整備と同時に、沖縄の風土性を取り入れた設計内容を要求事項に盛り込む事に積極的に取り組んだ様子を解明している。これは地域主義建築の展開が単に建築家社会だけの意匠表現活動に留まらず、地域社会が一体となって地域主義を推進した事を指摘しており、戦後沖縄の近代建築活動推進の解明に新たな視点を提供している。さらに、本研究では当選案を決める選定過程と競技設計参加7作品の計画内容の特色を分析する独自の方法により、当選案の優位性を導きだしている。

設計体制では、これまで本土を含む多くのジャーナリズムで紹介されていた建築家金城信吉の他に新たに中心的人物の存在を解明している。すなわち金城利光という建築家の存在があり、設計組織の中では利光が信吉の上司として実質的に設計の骨格を決定し、その細部意匠を信吉が担当したという役割分担の状況を明らかにした。利光と信吉の夫々の他の建築作品と那覇市公会堂の設計内容の類似性を比較分析する共に、関係者へのヒアリングから、従来の定説を修正した点は注目される。その他にも当時としては地元が無い大型物件としてその構造計画にも関心が集まったのであるが、そのための高い技術力を有するスタッフの獲得に対する取り組みにも触れる等、設計体制の全体像から個々の役割分担内容に至る迄多くの資料に基づいて検証がなされている。

さらに風土性の建築表現については、金城信吉の伝統意匠へのこだわりを沖縄伝統の赤瓦の製造過程から解き明かし、その結果、素材の新たな使い方とコンクリート建築に伝統素材を用いるユニークな表現方法を生み出した点を明らかにしている。この手法は、その後の地元建築界に広く用いられる様になり、沖縄らしさの表現に大きく貢献したが、その具体的な内容を解明し得たのは詳細図面の収集と赤瓦製造業者からの丹念な聞き取り調査によるところが大きい。

以上の点から、戦後沖縄の建築界を大きくリードした那覇市公会堂の建設過程を地域主義建築表現という視点から考察した本研究成果は、近代建築史の研究分野を大きく切り開くものとして高く評価される。

したがって、本研究成果は学術的に有用であり、提出された学位論文は博士の学位論文に相当するものと判断し学位論文の審査を合格とする。また、論文発表会における発表ならびに質疑応答において、申請者は琉球大学大学院理工学研究科博士後期課程修了者として専門分野および関連分野の十分な知識ならびに十分な研究能力を有していることが確認できたので最終試験を合格とする。